「蜃気楼」にある楽園

Kurt Vonnegut の *Cat's Cradle* における「虚構」の射程

三宅一平

はじめに

本発表では、1963 年に上梓された Kurt Vonnegut の *Cat's Cradle* における「虚構」の扱われ方を、作品の中心的要素となる架空宗教「ボコノン教」と架空物質「アイス・ナイン」の分析を通して論じた。ボコノン教は「無害な非真実」を寄る辺とすることを求める宗教であり、またそれが非真実であることを隠し立てすることもないものとして、虚構性を前景化した形で描かれる。一方、水の融点を常温に変えてしまう物質であり、作品の最終盤で世界の破滅をもたらしたアイス・ナインは、軍からの要請に応え得るものを考える過程で新たに産み出されたものである。この両者を具に見れば、成立過程や性質の内に虚構性を読み込むことが可能である。またこうした要素を含み持つ小説のタイトルが、糸の絡まりの中に形を見出し意味を与える遊びである *Cat's Cradle* であることに鑑みれば、虚構的に意味を生み出すことそのものが小説の中心的主題の一つとなっていることは想像に難くない。こうした観点から、特に虚構性に注目し、ボコノン教、アイス・ナインに象徴される「信仰」と「科学」がいかに描かれたかを「真実」という要素を鍵に分析した。同時に、ボコノン教が信仰される国であり、アイス・ナインによるアポカリプスの発生源ともなった貧しい小国 San Lorenzo がいかに「楽園」的に描かれたのか、そしてその「楽園」が以下に潰えたかを考察することで、虚構性が人に与える効果とその限界を考えた。

1. 「楽園」サン・ロレンゾ

本章では、小説後半の舞台となる San Lorenzo における「楽園」的性質を、虚構の具現化という要素を基に分析した。この国は、実際には楽園とは呼び難い貧しい国であるが、小説全体を通して「楽園」的イメージを付与される。特にその効果に寄与しているのが、"Don't be a fool! Close this book at once! It is nothing but *foma*!"(265)という注意書きから始まるボコノンの書を有するボコノン教である。この *foma* というのは「無害な非真実」と定義されるものであり、この書物では、読む者が最初に目にする警告として、非真実しか書かれていないと言っている。しかし、ボコノン教は宗教であり、そこには信仰のプロセスが存在しているはずである。つまり、ボコノンの書を読み、そこに非真実しかないと知ったうえで信仰する信者にとって、「非真実」であるということそのものが捨象されており、それが真実であるかどうかはもはや関係ない。ボコノン教の創設者 Bokonon は、この国をユートピアにすることを夢見ていた。彼は、嘘を作り上げることによって悲惨な世界を「天国」に変えることを望んでいる。「非真実」であることを捨象したボコノン教徒たちにとって、こうした「良い嘘」は、そのまま彼らの世界を良くするものになる。登場人物の一人である Julian Castle は、San Lorenzo の人々にとって彼らにまつわる真実は「敵」であるとし、「より良い嘘」こそが彼らの希望となっていると語る。現実の悲惨さ、向上の見込めなさにあって、彼らにできることは「嘘」を基に、現実の見方を変えてしまうことだけだったのである。また、こうした嘘に基づいて幸福を感じる人々は「役者」になぞらえられている。厳しい現実を気にしないことによって、幸せな嘘を「演じ」続けることによって、彼らは現状に関わらず幸せを享受することができたのである。この国の人々が「嘘」を具現化してしまうことに鑑みれば、彼らは「どこにもない場所」としてのユートピアを作ることすらできる。現実の苦しさを省みないという「非現実的」でグロテスクさを伴ったものではあるが、こうして San Lorenzo は鍵括弧付きの「本当の楽園」になるのである。

2. 「科学」と「罪」

本章では「科学」と、それに付随する「真実」と「罪」の在り方に焦点を当てた。小説の終盤で世界を凍り付かせることになるアイス・ナインは、泥に悩まされた海軍が、手軽に運べて泥を進みやすくすることを求めたことから生み出された。ここで注目すべきは、アイデアとして提案された、現実になかったものを現実にしてしまう過程である。ここで科学が行っている「発見」もまた、San Lorenzo の「嘘」同様に、虚構を現実にしてしまう過程であると読むことができる。また科学にまつわる言説として、「真実」を解き明かし、人々を幸福にするものであるというものがあり、この考えを信奉する科学者も作中に描かれる。しかし Vonnegut は、原爆が科学への希望を失わせる出来事であったことを様々なインタビューやエッセイで語っている。純粋に「夢」を描かせてくれるものであったはずの科学が持っていた負の側面を目にし、その「罪」を知ってしまっ

たのであり、作中でも原爆投下に伴い科学を離れた人々が描かれている。また、アイス・ナインが生まれたのは Ilium という街であったが、これは古代都市 Troy のラテン語名でもある。人々を幸福にするはずだった研究の中に潜む埋伏の毒が、トロイの木馬よろしく内側から科学信仰を破壊してしまったのだというアレゴリーをここに読み込むこともできる。科学が破壊をもたらすと知ってもなお、純粋に「真理が増えることはすなわち豊かになることである」と信じられるのであれば、それは San Lorenzo の人々と同様に、受け入れがたい現実を無視し、虚構を信じることに他ならない。そしてその科学が San Lorenzo に持ち込まれるのである。

3. サン・ロレンゾの失楽園

本章では、楽園として描かれた San Lorenzo が「科学」によって破滅する様を提示した。Leonard Mustazza は、創世記や『失楽園』において、目的は与えられるものであるということを示し、これを基にボコノン教の性質を論じている。ボコノン教において、神は目的を与えてくれるものではなく、目的を考えることを人間に任せているのだが、それによって「神に与えられる目的」という前提が崩れる。Mustazza は、これによって想定される「失われた楽園」が存在しなくなることを説く。この論を援用すれば、ボコノン教は、逆説的に楽園を喪失していない、原罪を負うことのなかった世界であると考えられる。またそこに、原爆以降「罪」を知ったと描かれる「科学」がアイス・ナインとして「楽園」たる San Lorenzo に持ち込まれたことは、すなわち「罪」が持ち込まれることと同義になりはしないか。これによって起こったアポカリプスでは、ボコノン教は人々を生かす力を持たず、集団自殺が起きることとなる。「科学」の「罪」によって「楽園」は失われたのである。

4. 「蜃気楼」にある楽園

本章では、San Lorenzo を描写する際に用いられた Fata Morgana から、この「楽園」の幻想性を論じた。蜃気楼は、存在はするが本来あるべきではない場所に建物などを目にする現象であり、真実を歪めるという点においてボコノン教的であると言える。San Lorenzo の人々は「嘘」を重ねることによって「現実」を受け入れている。ただ、ユートピアとしてあろうとした San Lorenzo がユートピアのまま物語の幕引きを迎えられなかったように、Vonnegut はこの「嘘」の限界にも意識的であったように思われる。蜃気楼が光の異常屈折であることに鑑みれば、いかに別の場所に現れようとも、その蜃気楼には一つの本体があるはずである。気象条件が合わなければ、ただ一つの本体を残し蜃気楼は消えてしまうだろう。この、分離していたものが一つに収斂していく様は、*Cat's Cradle* において、Bokonon、Jonah、そして作者 Vonnegut の三者の関係の中に見て取れる。小説の最後は、アポカリプスを生き延びていた Bokonon に、この本の書き手の役割を担っている Jonah が遭遇し、『ボコノンの書』の最後を聞く場面であり、その『ボコノンの書』の一節が *Cat's Cradle* 最後の文章でもある。これにより三者の書く本が全て同じ一文を結びにすることとなり、三者が一点に集まることとなるのだ。ある種 Vonnegut の別側面として一冊の小説に存在していた、Vonnegut という像の反映となる「蜃気楼」たる「作者」たちが、それを書いた Vonnegut という実像に帰ってくるのである。「楽園」的虚構世界は永遠に続かないということが、小説の終了を現実の Vonnegut に接合する構造によって、意識的に曝け出されているのである。

結論: 読者に宛てた『ボコノンの書』

本作に関して諏訪部浩一は、Vonnegut がボコノン教的な小説を書こうとしていた可能性を説く。そうであれば、作品内のみならず、その枠組みの外側にボコノン教的要素を書き込んだこの小説を、Vonnegut は『ボコノンの書』として我々読者にも宛てていると考えられる。San Lorenzo の人々と同様に、「非真実」を「解釈」しながら本作を読み進める読者は、まさに「綾取りの紐の描く模様」に意味を与えようともがくボコノン教徒と化しているだけなのかもしれない。そしてその非真実を寄る辺とする危うさを結末に描いた本作は、「虚構」の効果のみならずその限界をも描き、それを現実の我々にも逆照射しているのである。

主要参考文献

Mustazza, Leonard. *Forever Pursuing Genesis: The Myth of Eden in the Novels of Kurt Vonnegut*. Bucknell UP, 1990.

Vonnegut, Kurt. *Cat's Cradle*. 1963. Dial Press, 2010.

諏訪部浩一『カート・ヴォネガット―トラウマの詩学』三修社、2019 年。